

ランボーにおける卑猥性

— 「僧衣の下の心」を中心にして —

吉田正明

これまでランボー研究といえば、その多くは、初期詩篇、「地獄の一季節」、そして「イリュミナシオン」をその主たる研究対象としてきた。その反面、後期韻文詩の解明は、十分に行われてきたとは言い難いし、*Album Zutique* や「僧衣の下の心」に至っては、いまだほとんど手つかずの状態が続いている。果たして、それらの作品は論じるまでもないのであろうか。案外そこには、今まで見過ごされてきた（あるいは等閑視されてきた）ランボーの意外な一面があるのではなからうか。そこで本小論においては、今日知られているランボーの作品のなかで最長のテキスト¹⁾であるにもかかわらず、ランバルディア人たちからほとんど取り上げられることのなかった²⁾「僧衣の下の心」*Un coeur sous une soutane* を検討することで、これまで見落とされてきたランボーの新たな側面をクローズ・アップしてみたい。

本論に入る前に、この作品の伝記的背景を略述しておこう³⁾。その存在を示す最初の記述は、1888年1月20日にヴェルレーヌが、彼の出版人レオン・ヴァニエに宛てた手紙のなかに見られる。ヴェルレーヌはその手紙で、この作品を至急その所有者であるランボーのかつての修辞学級の担任ジョルジュ・イザンバルに返送してほしい旨を伝えているのである。この点に関してプチフィスは、次のように推測している⁴⁾。この作品をランボーから受け取ったイザンバルは、机の引き出しにそれを入れたまま忘れ去って放置していたのを、1885年頃偶然また見つけ、「呪われた詩人たち」によって⁵⁾ランボーを世に紹介するのに一役買ったヴェルレーヌにそれを見せ、見せられたヴェルレーヌは、それを出版しようとして一応ヴァニエに渡しておいたものであろうと。しかしヴァニエは、ヴェルレーヌの依頼を果たさず、その経緯は不明であるが、その草稿はランボー関係の資料を熱心に蒐集していたロドルフ・ダルザンの手に落ち、それからアンリ・サフレの手に渡ったものと推定されている。その後、1912年になって、ランボーの妹イザベルの夫パテルヌ・ベリションは、この博識な文芸蒐集家アンリ・サフレからその存在を知らされ、すぐにそのコピーを取るようになる。だが、イザベルと共にランボーの栄光を世に高めようとしていた彼は、おそらくこの作品の持つ反キリスト教的色合ゆえ、その公表は差し控えたのである。やがて、1917年

にイザベルが、そして1922年にベリションが死亡したことで、この作品は漸く日の目を見ることになる。この作品の最初の出版は、パリのロナルド・ダヴィエー社から、二百部たらずの限定出版で、アンドレ・ブルトンとルイ・アラゴンとにより行われたもので、1924年のことであった⁶⁾。この作品の信憑性に関しては、当時さまざまに議論されたが、その後の諸家の研究により、現在ではランボーの作品として一般に認められている。ところで、この作品については、イザンパールもヴェルレーヌもドラエーも、そのランボーに関する著述のなかでは一言も触れていない。したがって、それに関しては、テキストのみが残されており、その他の関係資料はいっさい存在しないことになる。ただ大方は、この作品は、ランボーが通っていたシャルルヴィルのコレージュで、同じ教室の半数を占めていた神学生たちを風刺するために書かれたものであろう、という点で諸家の意見は一致している。つまり、そこに表明されているのは、キリスト教を公然と奉じている者たちの偽善性に対して、ランボーが当時抱いていた嫌悪感であろう、というわけである。しかしながら、そのように言うだけでは、この作品の真の理解には至らないのである。これは実際、深い読みを要するテキストなのである。それでは、作品をしてみることにしよう。

これは、レオナルという神学生によって記された日記の体裁を取った物語である。日付から言えば、18..年 5月 1日から 6月30日までの二ヶ月間の出来事が中心になっている。最後の断章は翌年の 8月 1日となっているが、日付を持たない最初の断章と共に、その二ヶ月間に彼が体験した熱愛に対する冷めた回想に当てられており、一応中心になる事件とは切り離して考えるべきであろう。5月 1日から 5月12日までの六つの日記からなる前半部では、神学校生活の情景が描かれているが、そこで主に語られているのは、詩人レオナルに対する周囲の無理解と迫害である。彼は、迂闊にも自分の書いた詩を落としてしまい、それを院長に咎め立てされたり、意地悪な同級生たちから冷やかされたりするのである。5月15日から 6月30日にかけての計七つの日記⁷⁾から構成されている後半部においては、この作品の中心テーマたる主人公レオナルのティモティナ・ラビネットへの愛が語られている。一読した限りでは、そこに語られているのは、純真無垢な若者の純愛であって、プラトニックな愛を抱きながらも最終的には傷ついてほろ苦い恋の痛手を味わうことになる一神学生の、感傷的で滑稽味の多少入り混じった内心の告白にすぎないように思われる。しかし注意深く読んでいくと、この作品は二重の読みをさせるよう仕組まれているということが分かってくるのである。その点、《Intimités d'un séminariste》という副題も併せて、作品のタイトルそのものからして示唆的である。というのも、それによって喚起せしめられているのは、隠蔽、あるいは秘密といった観念にはかならないからである。また、5月12日の日記に記されているレオナルの詩において、《Ne devinez-vous pas...?》という言い方が三回繰り返されているが、彼はそのように言うことで、この日記には一種の〈謎解き〉devinette のようなものがあるのだと、われわれ読者に

それとなく仄めかしているようにも思えるのである。ではいったい、どのような意味が裏に隠されているのであろうか。

レオナルドは、18..年 5月 1日の日付を打った最初の日記のなかで、春の到来を告げると同時に、冬の間は「自習室に閉じ籠もり、もぐらのようにうづくまっていた」神学校の同級生たちを、次のように描写している。

(...) et j'ai remarqué que les élèves sortent fort souvent pour... dans la cour; (...) Ils restent fort longtemps à l'air, maintenant, et, quand ils reviennent, ricanent, et referment l'isthme de leur pantalon fort minutieusement, — non, je me trompe, fort lentement, — avec des manières, en semblant se complaire, machinalement, à cette opération qui n'a rien en soi que de très futile ⁸⁾...

ここでの語り口は明らかに嘲弄的である。それは、fort という語の繰り返しや、r-で始まる動詞の多用、さらには minutieusement, lentement, machinalement といった長い副詞のたたみかけに窺うことができるが、初めの方でことさら動詞を省略することで彼が仄めかしているのは、神学生たちの卑猥な行為ではなからうか。確かにその内容は暈されているものの、「ズボンの股ぐらを締める」所作などからして、そのことは十分推察し得るのである。このようにレオナルドの日記は、その裏に卑猥な意味 obscénité を隠した、言わば仮面の告白なのである。

ところで、当時どのような語なり表現なりがエロティックな意味を持っていたのかを知る上で大変参考になる辞書がある。初版がランボオの詩作の時期(1869年~74年頃)とはほぼ同時代の1864年に出された、アルフレッド・デルヴォーの *Dictionnaire érotique moderne*⁹⁾ がそれである。これから見ていく『僧衣の下の心』の読解にあたって、このデルヴォーの辞書は、われわれに有力な手掛かりを提供してくれることになる。

それでは手始めに、比較的分かりやすい例から見ていくことにしよう。マリアを讃える自作の詩篇をうっかり落としてしまったレオナルドは、院長室に呼び出されて、院長からその詩の内容を咎められた後、次のように記述している。

Puis il me mettait la main sur l'épaule, autour du cou, et ses yeux devenaient clairs, et il me faisait dire des choses sur cet écartement des jambes... Tenez, j'aime mieux vous dire que ce fut dégoûtant, moi qui sais ce que cela veut dire, ces scènes-là!... (...) — et je venais dans cette chambre, me f... sous la main de ce gros!... Oh! le séminaire¹⁰⁾ !...

ここで暗示されているのは、院長から無理強いされた男色の行為にほかならない。最後の方で f. と略された動詞は、おそらく foutre のことであろう。デルヴォーの辞書では、《 Le mot le plus énergique du langage érotique 》という定義がこの語に与えられており、そのさまざまな熟語が列挙されているが、なかでも foutre en cul (= sodomiser), あるいは foutre en main (= se faire branler) などの表現に近づけることができよう¹¹⁾。

今度は、上の院長の肖像から二例拾ってみよう。

(...) l'autre jour, en sortant de l'étude, j'ai vu à la fenêtre du second quelque chose comme le champignon nasal du sup***¹²⁾.

(...) son nez semblable à une batte était mû par son branle habituel¹³⁾.

字義通りに取れば、単に院長 (supérieur) の滑稽な鼻が描かれているだけに思える。しかしそれが暗に意味しているのは、皮肉にも彼の男根なのである¹⁴⁾。その証拠に、彼の鼻は「球打ち棒」batte に譬えられているのみならず、「いつものようにぶらぶら揺れていた」という含みのある表現までなされているのである。因みにデルヴォーの辞書の nez の項目には、《 Grand nez, grand vit. 》というフランスの古い諺が載っているが¹⁵⁾、この諺を踏まえて見直すと、院長の肖像は一層味わいを増してくるのではなからうか。

次に挙げたのは 6月16日の日記の抜粋で、レオナルが二度目にラビネット家を訪れた際、そこに居合わせた訪問客とその家の主を描いた部分である。

Césarín et le sacristain fumaient chacun un cigare maigre, avec toutes les mignardises possibles, ce qui rendait leurs personnes effroyablement ridicules; madame la sacristaine, sur le bord de sa chaise, (...) effeuillait délicieusement une rose¹⁶⁾ :...

まず前半は、セザラン (・ラビネット) と聖器係が、それぞれ葉巻を煙らしている情景が単に描かれているように思われようが、デルヴォーが男根を表す語の一つに挙げている cigarette¹⁷⁾ とこの cigare を同義に取るならば、その背後に、男色に耽る彼らの姿が浮かび上がってくるのである。その裏の意味を知ってこそ、それを行う彼らの「ありったけの甘ったれた様子」《 toutes les mignardises possibles 》と、その仕種が作り出す「おそろしいまでの滑稽さ」《 effroyablement ridicules 》の意味あいがかしかと把握されるのである。さらには、そのような彼らの男色的行為をあ

ざ笑うかのように添えられた *maigre* という形容詞が持つ辛辣さも。では後半はどうか。これも読み流してしまえば、聖器係夫人の所作は、花占いを髣髴とさせるあどけない仕種のように写るのであるが、デルヴォーの辞書には、*effeuiller* という動詞は《*masturber en parlant de la femme*》¹⁸⁾ とあり、*rose* は《*la nature de la femme*》¹⁹⁾ とあるので、そこにエロティックな意味を見るならば、彼女の行為も一変して卑猥な意味あいを帯びてくることになるのである。とすれば、そこで使われている *délicieusement* という副詞は、彼女の行為を見事に説明しているとは言えないであろうか。別の箇所でも、聖器係夫人の耽っている行為が *masturbation* であることを暗示する表現が見出せる。《*la sacristaine faisait la Madone*》²⁰⁾ がそれである。絵画において、聖母像はよく恍惚感を湛えた姿で描かれているが、一説によると、ヴィーナスの彫像を下敷きにしてマドンナ像が生まれたそうである²¹⁾。いずれにせよ、上の表現が自瀆行為を表していることは想像に難くない。時に、彼女に与えられた *Riflandouille*²²⁾ という名前にも、卑猥な言葉遊びが隠されていることが分かる。これは、リトレーによると本来 *égratigner* とか *écorcher* という意味で、転じて *piller* (盗む) を意味するようになった *rifler* という動詞と、男根を意味する *andouille*²³⁾ とから造られた合成語であって、その名前からして、聖器係夫人の淫らな行為が暗示されているのである。

その他の固有名詞にしても、卑猥な意味を隠し持っているものがいくつか見出せる。一例を挙げれば、神学校の自習室のことをレオナルは *Gethsémani* ²⁴⁾ と呼んでいるが、これには、《*j'ai d' ces manies*》という言い方が隠されているのではなからうか。ここで言う *manies* とは、上で見たように、神学生たちが耽っているものと思われる *masturbation* のことであろう。さらに例を増やしていくことは容易であるが、差し当たって、この作品の随所に卑猥な意味が隠されているということ、一応ここでは押さえておきたいと思う。

このような観点からすると、この作品に間投詞や感嘆符が多用されているということも意味深長である²⁵⁾。なかには、思わせぶりに三つあるいは四つもの感嘆符が重ねられている箇所さえあり、暗に、勃起 *erection* や射精 *éjaculation* といったエロティックな意味が仄めかされている場合も少なくないのである。

それではここで、主人公レオナルに照準を絞ってみたいと思う。前述したように、一見純真無垢で、信仰と詩にのみ身を捧げているように思われる彼の行為にも、実は同じように卑猥な意味が隠されているのである。まず、前の引用にもあったように、たびたび彼の脚を開く動作《*écartement des jambes*》についての言及が見られる。前に、院長から男性的行為を迫られる場面を引用したが、その直前に、レオナルは次のように院長から問い質される。

— Puis: Le jeune J*** m'a fait un rapport où il constate chez vous un

écartement des jambes, de jour en jour plus notoire, dans votre tenue à l'étude; il affirme vous avoir vu vous étendre de tout votre long sous la table, à la façon d'un jeune homme... dégingandé. (...); répondez: vous écartez beaucoup vos jambes, à l'étude ²⁶⁾ ?

彼のこの開脚動作に手淫 onanisme への暗示を見ることはそれほど困難ではないが、実はここだけではなく作品全般に渡って、彼の行為には二重の意味が持たされているのである。他の神学生同様彼もまた、自らがそう名付けている《 ce vaste Gethsémani (j'ai d' ces manies) 》たる神学校の生徒の一員というわけである。

ところで、自ら詩人をもって任じている彼は、日記のなかに合計四篇（うちラテン語で書いたもの一篇を含めて）の詩を書き記している。そのうちの一篇は、前述した通り、《 Ne devinez-vous pas...? 》という言い方が三回繰り返される詩であるが、ここでその詩の〈謎解き〉devinette を試みてみたい。以下がその詩である。

Ne devinez-vous pas pourquoi je meurs d'amour?
La fleur me dit: salut: l'oiseau me dit bonjour:
Salut; c'est le printemps! c'est l'ange de tendresse!
Ne devinez-vous pas pourquoi je bous d'ivresse?
Ange de ma grand'mère, ange de mon berceau,
Ne devinez-vous pas que je deviens oiseau,
Que ma lyre frissonne et que je bats de l'aile
Comme hirondelle²⁷⁾ ?...

まず気付くことは、レオナルドがここで三回鳥について言及しているということである。エロティックな言語においては、鳥の名で男根を表すことがあるが²⁸⁾、夢分析においても、飛翔や飛行が勃起 érection を意味する²⁹⁾ ということは、一般の知るところである。《 Accroupissements 》の次の詩句も、それを念頭に置かなければ、真の味わいは見落とされてしまうであろう。

Quelque chose comme un oiseau remue un peu
A son ventre serein comme un monceau de tripe ³⁰⁾ !

このようにランボーにあっては、鳥が男根の意味に使われる場合があるのである。レオナルドの詩でも、そのような意味で用いられているのではなからうか。では、春の到来が彼にもたらしたものは果たして何か。実は、この詩を解く鍵は、レオナルドが作ったもう一篇の詩に隠されているのである。彼が、ティモティナ・ラビネットのた

めに書いたと称するその詩を分析した後で、それを明らかにしたいと思う。

Dans sa retraite de coton
Dort le zéphyr à douce haleine:
Dans son nid de soie et de laine
Dort le zéphyr au gai menton!

Quand le zéphyr lève son aile
Dans sa retraite de coton,
Quand il court où la fleur l'appelle,
Sa douce haleine sent bien bon!

O brise quintessenciée!
O quintessence de l'amour!
Quand la rosée est essuyée,
Comme ça sent bon dans le jour!

Jésus! Joseph! Jésus! Marie!
C'est comme une aile de condor
Assoupissant celui qui prie!
Ça nous pénètre et nous endort³¹⁾ !

.....

表面的な読みをした限りでは、彼がこの詩に与えた《La Brise》という題名からも窺えるように、これは、ロマン主義的抒情 *lyrisme romantique* を色濃く反映した詩であるように思われる。ところが、レオナルがこの詩をラビネット家の人々の前で朗読した時の彼らの反応を見れば、この詩の隠されたテーマが何であるかを察知することができるように思う。彼らの反応とは以下のごときものである。

Toute l'assistance pouffa de rire: les messieurs se penchaient l'un vers l'autre en faisant de grossiers calembours; mais ce qui était surtout effroyable, c'était l'air de la sacristaine, qui, l'oeil au ciel, faisait la mystique, et souriait avec ses dents affreuses³²⁾ !

その場に居合わせた人々の一斉の吹き出し笑いは、レオナルの詩の過度の抒情性のためではなく、その裏の卑猥な意味を察したがためなのである。彼自身みんなの笑い

の意味あいを《 Je crus m'apercevoir de quelque chose. 》³³⁾ と言っているように、薄々勘づいているのである。その詩の内容に触発されたかのように、聖器係夫人が例によって onanisme に耽って（《 faisait la mystique 》）恍惚となっている様子にも注目しよう。実際、彼の詩こそ「下卑た洒落」《 grossiers calembours 》から成り立っているのである。

さてレオナルの詩に戻ろう。この詩においても前の詩と同様鳥の翼のイメージが見られる。感嘆符の多さも目に付く。そこで歌われている「西風」《 zéphyr 》に鳥のイメージを重ねてみると（《 le zéphyr lève son aile 》）、前の詩と同じ解釈が成り立つのではなからうか。すなわち zéphyr = oiseau = pénis というわけである。このような観念に立てば、「西風」の寝床が、「綿」や「絹」や「羊毛」から出来ていたとしても何ら不思議ではない。《 zéphyr au gai menton 》という表現からも、そのことは確かめられる。この表現には、latiniste ランボアの言葉遊びが隠されているのである。menton はラテン語の中性名詞 mentum から来ているが、ランボアはそれを、ラテン語で男性の性器を意味する語の一つである mentula に掛けて使っているのではなからうか。それが「陽気」なのも、この詩が春を歌ったものだからである。今や《 le zéphyr lève son aile 》という表現に暗示されているのが勃起 érection であることは容易に見取れよう。《 quintessence de l'amour 》には、デルヴォーが精液を表すとしている次行の《 rosée 》³⁴⁾ と同じ意味が持たされているのではなからうか。そこで用いられている《 essuyée 》という動詞は、語源に遡って「液をしぼり出す」という意味に解すべきであろう³⁵⁾。そうでなければ、《 Comme ça sent bon dans le jour! 》という意味が失われてしまうからである。最終節も同じ着想からきていることが分かる。ここでも、鳥の翼のイメージによって喚起されているのは男根である。それが「祈る人をまどろませる」《 Assoupissant celui qui prie! 》と言っているのは、自慰 onanisme への暗示である。prier という動詞にはエロティックな意味があるということも指摘しておきたい³⁶⁾。最終行の《 Ça nous pénètre et nous endort! 》にも自瀆行為が暗示されている。エロティックな言語で ça と言えば、それは男女の sexe の遠回しな言い方になることは、デルヴォーの辞書によるまでもなく³⁷⁾、察しが付くであろう。このようにこの詩の隠されたテーマとは、男根の讃歌であり自慰の称揚なのである。ところで、この詩の真の最終行は、省略されていることから分かるように、レオナルの心のなかに伏せられているのである。彼はその理由を、《 La fin est trop intérieure et trop suave: je la conserve dans le tabernacle de mon âme. 》³⁸⁾ と言っている。もしその詩句が書かれていたとしたなら、おそらくわれわれの解釈をより確かなものにしたことであろう。

上で行った詩の分析から、最初の詩の謎解き devinette の答えは、もはや明らかであろう。今やわれわれは、どうして彼が「死ぬほど恋しい」のか、なぜ「陶酔に胸

たぎる」のか、そしてまたどうしたわけで彼が「鳥になり」、「豎琴がふるえ」、「燕のようにばたく」のか、その理由を知っている。春になると燕がやって来るように、若者に自然と訪れる止むに止まれぬ性欲（勃起）、それが解答である。

ところで、詩の最後の方にも出てきているように、詩人レオナルを象徴しているかに見えるのは、日記中でたびたび触れられている古代ギリシャの楽器名である。5月4日の日記でもそれが語られている。表向きは彼の詩情の高まりが記されているかのように思われるその部分を見てみることにしよう。

... Tenez, hier, je n'y tenais plus: j'ai étendu, comme l'ange Gabriel, les ailes de mon coeur. Le souffle de l'esprit sacré a parcouru mon être! J'ai pris ma lyre, et j'ai chanté: (...).

O! si vous saviez les effluves mystérieuses qui secouaient mon âme pendant que j'effeuillais cette rose poétique! Je pris ma cithare, et comme le Psalmiste, j'élevai ma voix innocente et pure dans les célestes altitudes!!! O *altitudo altitudinum!* ³⁹⁾ ...

ここにおいても、読者への目配せをレオナルは忘れていない。《 Tenez 》と仮想の読み手に呼び掛けているように、彼が「もうこれ以上我慢できなくなった」ところのもの（《 y 》）に、われわれの注意をことさら向けているのである。《 si vous saviez les effluves mystérieuses 》もまた然りである。さて、前半部で仄めかされているのが勃起であることは、彼の詩の分析から、すでに明らかであろう。重力に反して直立できるという pénis の注目すべき性質が、われわれに飛行夢を見させる、とフロイトは言っているが⁴⁰⁾、レオナルもまさに大空に羽ばたいて有頂天になっているのではないか（《 j'ai étendu, (...) les ailes de mon coeur. 》 coeur については後述する）。また、《 j'effeuillais cette rose poétique 》という表現には、卑猥な意味があることをわれわれはすでに知っている⁴¹⁾。彼が我慢しきれなくなったのは、以上から判断して手淫 masturbation に違いない。よって、「神秘的な発散物」《 effluves mystérieuses 》とは、精液 sperme のことなのである。最後に、「天の高み」という表現が繰り返してくるが、フランス語で、《 être aux anges 》、あるいは《 être ravi au troisième (septième) ciel 》という言い方をすると、エクスタシーを表す表現になるが、まさにここで暗示されているのは、自慰によって到達する絶頂感にはかならないのである。三つも重ねられた感嘆符が、何よりも雄弁にそのことを物語っているのではなからうか。こうした視座に立てば、手に取られた《 lyre 》や《 cithare 》が何を表しているかは、もはや明らかであろう。次に挙げたのは、6月30日の日記の抜粋である。

Moi aussi, à dix-huit ans et sept mois, je porte une croix, une couronne d'épines! mais, dans la main, au lieu d'un roseau, j'ai une cithare! Là sera le dictame à ma plaie⁴²⁾ !...

ティモティナ・ラビネットへの恋に破れたレオナルの心の傷を癒してくれるという、この手のなかの《 cithare 》に自瀆行為への暗示を見ることは、それほど困難ではないだろう。このように、この作品に出てくる古代ギリシアの楽器は、ポエジーではなく、男根を象徴しているのである。ところで、フランス語の俗語においては、楽器をもって男根を表すというのは、ほとんど常套手段になっていると言っても過言ではない⁴³⁾。ランボーもその伝統を踏まえて、cithare や lyre といった楽器に、その裏の意味を持たせたわけである。

ここで、再び院長の叱責の場面を振り返ってみたいと思う。特に院長が問題にしているのは、レオナルがその詩のなかで、「処女懐胎」《 conception 》と言わずに、「孕んだ処女」《 Vierge enceinte 》という表現をしているということである。彼もまた、レオナルの詩に秘められた obscénité を見抜いている一人ではなからうか。次の院長の言葉に、すべては要約されうる。

— Votre lyyyre! votre cithâre! jeune homme! votre cithâre! des effluves mystérieuses! qui vous secouaient l'âme! J'aurais voulu voir! Jeune âme, je remarque là dedans, dans cette confession impie, quelque chose de mondain, un abandon dangereux, de l'entraînement, enfin ⁴⁴⁾ !—

ことさら音節を引き延ばして発音された《 lyre 》や《 cithare 》を、その裏の意味に取らない限り、ここに込められた風刺の意味は失われるほかない。院長が《 Vierge enceinte 》に見たのは、レオナルに孕まれたマドンナの姿ではなかったであろうか。

また、このように解釈して初めて、意地悪な同級生たちの冷やかしも、その真の風味を獲得するのである。

Oh! mes condisciples sont effroyablement méchants et effroyablement lascifs! A l'étude, ils savent tous, ces profanes, l'histoire de mes vers, et, aussitôt que je tourne la tête, je rencontre la face du poussif D***, qui me chuchote: Et ta cithare, et ta cithare? et ton journal? Puis l'idiote L*** reprend: Et ta lyre? et ta cithare⁴⁵⁾ ?

ここで彼らを形容する《 lascifs 》という形容詞を、十分考慮すべきであろう。

さて、以上の諸点を踏まえた上で、題名の「僧衣の下の心」*coeur* が何を意味しているのかを明らかにしたい。まず、例の《 *Ne devinez-vous pas...?* 》で始まる詩が書き記されている 5月12日の日記から見てみよう。レオナルは、意地悪な同級生たちから取り上げられないようにと、その詩を次のような場所に隠し持つのである。

(...)j'ai cousu ces vers en bas de mon dernier vêtement, celui qui touche immédiatement à ma peau, et, pendant l'étude, je tire, sous mes habits, ma poésie sur mon coeur, et je la presse longuement en rêvant⁴⁶⁾.

ここでまず第一に気付くことは、*coeur* のある場所が、「肌に直に触れる下着の裾」の間近であるということである。次に、彼が自習時間中夢見ながら耽っている行為が、手淫 *masturbation* を髣髴とさせることである（《 je tire, sous mes habits, ma poésie sur mon coeur, et je la presse longuement en rêvant. 》）。その詩からして、自讀者 *onaniste* の欲望の歌であったことを思い起こそう。実際、レオナルの *coeur* は、感情 *sentiments* を育む場というよりは、肉欲 *sensualités* の宿る場であると言った方がよい。《 J'ai le coeur si plein, voyez-vous, que cela me ruine l'estomac! 》⁴⁷⁾ とは彼自身の言である。食欲と性欲が相反するものであることは、だれもがつとに知って経験したことであろう。勃起は食欲を減退させ、逆もまた然りである。さらに補足しよう。デルヴォーによると、*cela* は男根 *membre viril* を指し示す数ある *signifiant* のうちの一つだとされている⁴⁸⁾。とすると、次の等式が成立することになる。すなわち、*coeur = cela = membre viril*、これである。このようにこの作品においては、*coeur* が意味しているのは、古代ギリシャの楽器がそうであったように、男根なのである。そのように解釈して初めて、この作品は生きてくるのである。実は、作品の冒頭からすでに、*coeur* の裏の意味は仄めかされているのである。

O Thimothina Labinette! Aujourd'hui que j'ai revêtu la robe sacrée, je puis rappeler la passion, maintenant refroidie et dormant sous la soutane, qui l'an passé, fit battre mon coeur de jeune homme sous ma capote de séminariste⁴⁹⁾ !...

最後の《 *capote de séminariste* 》（*séminariste* に関しては後述する）という表現に注目しよう。この《 *capote* 》なる語は、「頭巾つき長外套」の他に、「コンドーム」*préservatif* という意味も合わせ持っているのである⁵⁰⁾。すでに、レオナルの仮面は剥がれたと思う。彼がティモティナ・ラビネットに対して抱いている

のは、プラトニックな純愛などでは決してない。では最後に、ラビネット家での彼の所作の裏に隠された真の意味を明るみに出すことによって、そのことを証明しよう。

レオナルは二度ラビネット家を訪れる。二度とも彼は、ティモティナ・ラビネットの前で、一見ぎこちない動作を繰り広げるのであるが、しかしそれは、彼女に対する極度の羞恥心からというわけではないのである。それではまず、一回目の訪問から見てみることにしよう。情況は、ティモティナに一目惚れ *coup de foudre* したレオナルが、自分の思いの丈をなんとかして彼女に伝えようとするところである。

Je tâchais de lui faire voir ma passion; et, du reste, mon coeur, mon coeur me trahissait! (...) Peu à peu, aux accents magiques de sa voix, je me sentais succomber; enfin je résolus de m'abandonner, de lâcher tout; et, à je ne sais plus quelle question qu'elle m'adressa, je me renversai en arrière sur ma chaise, je mis une main sur mon coeur, (...) et, un oeil vers Thimothine, l'autre au ciel, je répondis douloureusement et tendrement, comme un cert à une biche:

— Oh! oui! Mademoiselle... Thimothina!!!!

Miserere! miserere! (...) — De l'oeil que je tendais au plafond découla la saumure amère:— mais, de l'oeil qui te regardait, ô Thimothina, une larme coula, larme d'amour, et larme de douleur ⁵¹⁾ !...

coeur の裏の意味を知っている者にとっては、この場面が何を表しているのかは明白であろう。すなわち、上で描かれているのは、男根の勃起から始まり、自慰によるエクスタシーをへて、射精に至るまでの過程、それ以外の何ものでもない。《 *comme un cert à une biche* 》とあるのは、発情期の動物に自らの行為を見立てているからにはほかならない。では、「一方の眼をティモティナに向け、他方の眼を天に向けて」という記述は、いったいどのように解釈すればよいのであろう。その鍵は、これまた卑猥表現の宝庫である *Album Zutique* のなかの、ヴェルレーヌを当て擦ったランボオの《 *Fête galante* 》と題された詩にある。以下に引用しよう。

Rêveur, Scapin
Gratte un lapin
Sous sa capote.

Colombina
— Que l'on pina! —
— Do, mi,— tapote

L'oeil du lapin
Qui tôt, tapin,
Est en ribote ⁵²⁾

この詩も卑猥な言葉遊び（ランボーがこの種の言葉遊びに発揮した腕の冴えは、ズエティストたちを驚愕させたに違いない⁵³⁾）から成る詩である。この詩を読み解くには、そこに二度出てくる《un lapin》という単語を女性名詞 lapine に置き換えてみるだけでよい。la pine が男根の意味であることは、デルヴォーの辞書によるまでもなく、どの辞書でも確かめられることである。五行目の《pina》という動詞からも、そのことは仄めかされているのではなからうか。スカバンが「夢見ながら」耽っているのは手淫なのである。《Gratte un lapin(la-pine)》という表現は、デルヴォーの辞書にある《Gratter son devant》 (= se masturber) ⁵⁴⁾ と同じ意味に取るべきであろう。ここでも、《Sous sa capote》には二重の意味が持たせてあることは言うまでもない。以上から、《L'oeil du lapin(la-pine)》とは、男根の先端部を指しているということが分かるのである。それが「酔いしれている」のも、スカバンの行為がもたらした当然の結果と言える。本論に帰ろう。「一方の眼をティモティナに向け、他方の眼を天に向ける」という記述も、彼女に向けられた方の眼を、《Fête galante》において持たされている意味に取らない限りは、理解しがたい記述になってしまうであろう。手淫に耽るレオナルの姿がそこには認められるのではなからうか。よって、最後にそこから流れ落ちる涙とは、精液のことなのである。デルヴォーの辞書がその解釈を正当化してくれる。pleurer という動詞には「射精する」という意味があるからである⁵⁵⁾。そこから larme = sperme という等式が難無く得られるであろう。絶頂期を表しているのは、もちろん、思わせぶりに感嘆符が四つも使われている箇所には他ならない。

再度ラビネット家を訪れた際レオナルが行う所作にも、上で見たような裏の意味が否応なく持たされているのである。少しはしよって以下に引用してみよう。

Je ne parlais pas, mais mon coeur parlait! (...); relégué derrière la chaise du sacristain honoraire, je pouvais laisser voir sur mon visage les mouvements de mon coeur sans être remarqué de personne: je me livrai donc à un doux abandon; (...) Moi, derrière le gros sacristain, je me livrais à mon coeur.

(...) Alors, transporté, furieux d'amour, je me baissai très fort vers elle, en tenant mes mains comme à la communion, et en poussant un ah! ... prolongé et douloureux; *Miserere!* tandis que je gesticulais, que

je priais, je tombai de ma chaise avec un bruit sourd, et le gros sacristain se retourna en ricanant, et Thimothina dit à son père:

— Tiens, monsieur Léonard qui coule par terre!

Son père ricana! *Miserere!* ⁵⁶⁾

下線を施した箇所注目してもらいたい。ここでも onaniste レオナルの、勃起からエクスタシーをへて射精に至るまでの過程が暗示されていることは、今までの観点に立って見れば、なんなく理解されよう。ところで、これが彼の最後の訪問となるわけであるが、それは彼の密かな行為（《 sans être remarqué de personne 》）をラビネット親娘に勤づかれてしまったからではなからうか。故意に音節を引き延ばされ強調された《 *Miserere* 》という言葉の繰返しに、そのことが窺われるように思う。ティモティナが彼女の父親に向かって言っている一見なにげない発言は、二重の意味に取って初めて、その真の味わいを獲得するのである。表向きはレオナルの椅子からの落下を述べているわけであるが、その裏の意味は射精 éjaculation にほかならない。先ほどの《 de l'oeil qui te regardait, ô Thimothina, une larme coula, ... 》を思い起こそう。その無様な恰好をティモティナに見つかり、彼女の父親にも嘲笑されるレオナルは、まさに《 *Miserere* 》の一語に尽きるのではなからうか。

以上検討してきたように、「僧衣の下の心」*coeur* とは男根のことであり、「一神学生の内心の秘密」《 *Intimités d'un séminariste* 》とは自瀆行為を指しているのである。それならば、*séminariste* という語にも、卑猥な意味あいを持たされているとは考えられないだろうか。というのも、*séminaire* という語は、もともと *semence*（ラテン語の *semen*）「精液」から来ているからである。ここでも、*latiniste* ランポーに敬意を払ってもよいのではなからうか。すなわち、敢えて訳述するとしたなら、「射精する人」*éjaculeur* とでもなろうか。とすれば、副題がこの作品を見事説明しきっているということになるであろう。レオナルの日記が5月1日から6月30日までの二ヶ月間の出来事を射程に置いたもので、春の到来を告げることから始まっているということも、実は故なきことではないのである。彼の性欲は春の間だけ持続し、ティモティナとの訣別は、夏の到来、すなわち春という欲情の季節の終焉を象徴しているからである。それでは、ティモティナ・ラビネットはレオナルにとってどのような存在であったのか。それにはまず、*Labinette* という固有名詞に隠された意味を暴くに如くはない。リトレーによると、(*la binette*) という語は *tête ridicule* という定義が与えられているが、ここではむしろ、デルヴォーが男根を表す語として挙げている (*la bite*) あるいは (*la bibite*)⁵⁷⁾ に近づけたいと思う。おそらくランポーはこれらの語を基にして、音のそれほど違わない *Labinette* という語を造り出したのであろう。つまり、それが暗示しているのは男根なのである。以上の諸点を総合して考えると、レオナルにとってティモティナ・ラビネットは、己の自慰の夢想

(夢精)の対象ではなかったであろうか。

このように、この作品においてランボーは、登場人物の一見なにげない行為の裏に、あるいはまた、美しく清らかなイマージュを喚起する言葉に、卑猥な意味を隠し持たせることで、われわれ読者に二重の読みを強いているのである。その結果、通常の安定した読みは攪乱され、言わばテキストの dynamisme とでも呼ぶべきものが生み出されるのである。ここでは、表と裏の意味の落差が大きいために、読み手は精神的ショックを感じないわけにはいかないであろう。おそらく現代のわれわれよりも、当時の読者の方がより敏感にそれを察知したであろうことは想像に難くない。この作品が長い間公にされなかったのも、もしかしたらそこに原因があったのかも知れない。だがあくまでそれは推測の域を出ないのであるが、それでは、この作品を書いたランボーの意図は何であったのか。まず第一には、これまで言われてきたのと同じ解釈に行き着くのだが、キリスト教徒にとって神聖で冒すことのできない *coeur* (キリストの *Sacré-Coeur* を想起しよう。) を汚し冒瀆するためであったと言えるであろう。レオナルの日記は実のところ仮面の告白であると前に指摘したが、これは、キリスト教徒にとっては真摯であるはずの告白 *confession* のパロディーでなくて何であろう。《 *Peut-être un jour, revenu dans cette ville, aurai-je le bonheur de confesser ma chère Thimothina?...* 》⁵⁸⁾ とは、一年後の 8月 1日のレオナルの日記にある記述である。この《 *confesser* 》という動詞に隠された卑猥な意味⁵⁹⁾ をもはや疑うまい。

ランボーの攻撃の矛先はしかしながら、キリスト教にばかり向けられているのではない。古代ギリシャの楽器も男根を表していたことを思い起こそう。実際のこの作品は、当時の詩壇をも嘲弄しているのである。感傷的で主観的(実際ランボーが目指したのは客観的な詩である⁶⁰⁾)な詩風 *lyrisme romantique* も、形式美に徹した高踏派の不感無動 *impassibilité* (かつては自ら高踏派をもって任じていたランボーではあるが⁶¹⁾)も、ともにそこでは汚濁を免れ得ないのである。レオナルの詩がそのパロディーであることは既に明らかであろう。「見者の手紙」の中でランボーは、ボードレールに敬意を表しつつも、「彼があまりにも芸術的な環境に生きた」ことを非難しているが、ランボーが詩の未来に予見しているのは、逆に唯物論 *matérialisme* であることを⁶²⁾ 忘れないようにしよう。あるいはまた、《 *Le Poète se fait voyant par un long, immense et raisonné dérèglement de tous les sens.* 》⁶³⁾ という彼の信念も。「僧衣の下の心」においても、「あらゆる *sens* (感覚とも意味とも解し得る。) の長く膨大かつ論理的な錯乱」が行われているとは言えないであろうか。いずれにしても、ランボーが己の詩に課したのは *anti-spiritualisme* であったわけである。

反精神主義と言ったが、そこには、厳格なカトリック信者であると同時にわが子に対して手厳しかった権柄ずくの母親ヴィタリー・キューフの監視の下で、本来あるべ

き母親の愛情を毫も知らずに育ったランボーの、抑圧された性とそれにとまなうコンプレックスが潜んでいるのではなからうか。「愛の砂漠」でランボーは、次のように書いているのである。

N'ayant pas aimé de femmes, —quoique plein de sang!—il eut son âme et son coeur, toute sa force, élevés en des erreurs étranges et tristes⁶⁴⁾.

シュザヌ・ベルナールはここに同姓愛への暗示を見ようとしているが⁶⁵⁾、少なくともここには、性的コンプレックスを抱く若者の姿を認めることができよう。coeurを本論で見てきたような裏の意味に取るなら、下線部が何を意味しているかはもはや明らかであろう。このような抑圧された性本能が作品を通して表出してくることに何の不思議があろう。「地獄の一季節」でランボーは、《 J'aimais (...) livres érotiques sans orthographe 》⁶⁶⁾ とふと洩らしているが、ランボーにあっては、西欧キリスト教社会、あるいは当時のフランス詩壇を呪詛するのと相まって、érotismeはobscénité という形を取ってしばしば表現されたのであろう。

いずれにしても、本小論を通して、今までとかく神秘めかして語られることの多かったランボーを、多少なりともわれわれと同様血肉を備えた一個人として示せたのではなからうか。これからもこのような角度から、もう一度ランボー詩全体を見直さなければならないように思われる。その作業は今後の課題とならう。

注

- 1) プレイヤッド版にして15ページに渡る。ただし「地獄の一季節」を章単位（9章から成る）ではなく全体として見ると、同版で25ページに及ぶ。
- 2) この作品を扱った数少ない論文のうち、次の論文は示唆的である。Marc ASCIONE et Jean-Pierre CHAMBON: *Les <zolismes> de Rimbaud*, in *Europe*, n° 529-530, mai-juin 1973, pp.114-132.
- 3) 詳しくは、人文書院刊「ランボー全集I」, pp.323-325 を参照されたい。
- 4) Pierre PETITFILS: *L'Oeuvre et le visage d'Arthur Rimbaud*, Nizet, 1949, p.67.
- 5) 「呪われた詩人たち」のなかのランボーの章は、1883年10月5日号から同年11月10日号にかけて、週刊誌「リュテース」に連載された。翌年ヴァニエ書房から出版。
- 6) この作品が初めて全集に載ったのは、ロラン・ド・ルネヴィルとジュール・ムーケ共編のいわゆる旧プレイヤッド版（1946年刊行）においてであった。
- 7) ただし《*Date incertaine. — Attendons!...*》という短い記述を、一片として計算すればの話であるが。
- 8) Arthur Rimbaud, *Un coeur sous une soutane*, in *OEuvres complètes*, édition établie, présentée et annotée par Antoine ADAM, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972, p.191.以下ランボーのテキストの引用はすべて上記の版による（以下 O.C. と略記する）。
- 9) われわれが現在利用できるのは次の版である。Alfred DELVAU: *Dictionnaire érotique moderne*, Slatkine reprints, Genève, 1968. 以下デルヴォーの辞書からの引用はこの版による（以下 D.E.M. と略記）。
- 10) O.C., p.194.
- 11) D.E.M., pp.195-198を参照。
- 12) O.C., p.191. なお引用の綴り字表記はプレイヤッド版にそのまま従い、引用中の下線による言葉の強調は特に記さない限りは筆者による。
- 13) O.C., p.193.
- 14) デルヴォーによると、champignon, nez はともに男根を表す語とされている。Cf. D. E.M., p.89, p.274.
- 15) D.E.M., p.274. 《Long nez, longue pine》とも言う。Cf. D.E.M., p.240.
- 16) O.C., p.202.
- 17) D.E.M., p.97.
- 18) D.E.M., p.146.
- 19) D.E.M., p.333.
- 20) O.C., p.203.
- 21) 若桑みどり「薔薇のイコノロジー」青土社, 1984, 16頁。

- 22) *O.C.*, p.201.
- 23) *D.E.M.*, p.22.
- 24) *O.C.*, p.199.
- 25) プレイヤッド版15ページ中、間投詞 *ô(oh)* の使用は16回で、感嘆符の使用は全部で161回にもぼっている。
- 26) *O.C.*, p.194. なお、*jambe* という単語にも男根の意味がある。Cf. *D.E.M.*, p.226. また *J**** は、これも男根を表す Jacques (Jacquot) が略されたものではなからうか。Cf. *D.E.M.*, p.225.
- 27) *O.C.*, p.195.
- 28) 例えば *moineau* (*D.E.M.*, p.263) や *perroquet* (*D.E.M.*, p.292) が挙げられる。
- 29) フロイト『精神分析入門(上)』高橋義孝・下坂幸三訳、新潮文庫、196-197頁、およびフロイト『夢判断(下)』高橋義孝訳、新潮文庫、113頁を参照されたい。
- 30) *O.C.*, p.42.
- 31) *O.C.*, p.199.
- 32) *O.C.*, p.203.
- 33) *O.C.*, p.203.
- 34) *D.E.M.*, p.333.
- 35) *essuyer* の語源はラテン語の *exsuccare* (*exprimer le suc*) である。
- 36) デルヴォーの辞書では *prière* は性交の意味とされているが (*D.E.M.*, p.316), ここではむしろ *Dévotion* でランボーが語っている *prière muette*, すなわち *masturbation* のことではなからうか。Cf. *O.C.*, p.153.
- 37) *D.E.M.*, p.77.
- 38) *O.C.* pp.199-200.
- 39) *O.C.*, p.192.
- 40) 上記注 29) を参照。
- 41) 上では女性の *onanisme* の意味で使われていた表現であり、デルヴォーの辞書にもその意味で挙げられていたのであるが、通常の言葉の使用の攪乱や転覆をあれほど大胆に行ったランボーからすれば、その表現を男性に当てはめたとしてみたら驚くに当たらない。
- 42) *O.C.*, p.205.
- 43) 例えば *corde sensible*, *grosse corde*, *flageolet*, *flûte à un trou*, *petite flûte*, *violon* などが挙げられる。Cf. *D.E.M.*, pp.254-255.
- 44) *O.C.*, p.193.
- 45) *O.C.*, p.194.
- 46) *O.C.*, p.195.
- 47) *O.C.*, p.197.
- 48) *D.E.M.*, p.77.
- 49) *O.C.*, p.191.

- 50) *D.E.M.*, p.80.
- 51) *O.C.*, p.197.
- 52) *O.C.*, p.209.
- 53) レオン・ヴァラードはエミール・ブレモンに宛てた手紙のなかで、すべての *Vilains Bonshommes* を魅惑し驚愕せしめたランボーを評して《 *le même (à peine 17 ans!) dont l'imagination, pleine de puissance et de corruptions inouïes* 》と言っている。Cf. *Lettre à E. Blémont du 5 octobre 1871*. 何よりもランボーは、レオン・ヴァラードと並ぶ24篇という最も多くの詩を *Album Zutique* に書き記しているのである。ランボーがこの種の言葉遊びに秀でていたことの何よりの証拠である。
- 54) *D.E.M.*, p.216.
- 55) *D.E.M.*, p.303.
- 56) *O.C.*, pp.201-202.
- 57) *D.E.M.*, p.254.
- 58) *O.C.*, p.205.
- 59) 性交するという意味を持っている。Cf. *D.E.M.*, p.109.
- 60) *Lettre à Georges Izambard du 13 mai 1871 (O.C., p.248)* を参照。
- 61) *Lettre à Théodore de Banville du 24 mai 1870 (O.C., pp.236-237)* を参照。
- 62) *Lettre à Paul Demeny du 15 mai 1871 (O.C., p.252)* を参照。
- 63) *Ibid.*, *O.C.*, p.251.
- 64) *O.C.*, p.159.
- 65) *Oeuvres de Rimbaud*, édition de S. BERNARD, Garnier Frères, 1960, p.450.
- 66) 《 *Alchimie du verbe* 》 in *Une saison en enfer, O.C.*, p.106.